

鉄山を襲つた伝染病

人形仙三十七人墓

上齋原の人形仙の中腹、江戸時代

に整備された街道「倉吉往来」脇の墓地に、「三十七靈供養塔」と刻まれた大きな石碑が目につきます。これは、明治十二（一八七九）年に流行した伝染病「コレラ」にかかる亡くなつた人形仙国一山鉄山の居住者の供養塔です。

コレラは、紀元前から世界各地で流行した伝染病ですが、日本には十九世紀前半頃に発生したといわれます。現在では国内で発生することはほとんどなく、適切な治療をすれば死亡率も低い病気ですが、江戸時代には治療方法もわからず、短期間で多くの人々に感染し死をもたらすコレラは、感染すれば「コロリと死んでしまう」とから、「コロリ（虎狼病）」とも呼ばれ、恐れられていました。

明治十二年は、国内にコレラが大発生した年で、岡山県内では、五月二十二日に児島郡下津井村（現倉敷市）で最初に確認され、この年に感染したのは五千人とも九千人ともいわれ、死亡者は三千人近くに及んで



「病癆虎狼廻予防説」(明治9年)
岡山県令から通達されたコレラの予防法(「中島家文書」)



人形仙山中に残る鉄山の石垣の跡

います。

人形仙国一山鉄山は、慶応二年（一八六七）から明治二十一年（一八八八）まで操業されていた、「たたら製鉄」に従事する職人やその家族で構成された集落で、この地にコレラが発生したのは、明治十二年七月二十七日（一説には二十九日）のことです。この当時居住していた約二〇〇人（一説には一三〇人）のうち、六十二人が感染し、三十七人が亡くなりました。岡山から運ばれたムシロにコレラ菌が付着していたという説もありますが、定かではありません。いずれにしても、山陽一山陰を結ぶ街道近くにあつた鉄山ですので、往来する旅人や物資が感染源であった可能性は高いでしょう。

こうした中での、鏡野町域の動きとしては、新町宿場町のある香々美中村では、臨時村会を開き、予防申合規則を議定し、旅館や茶屋などの取締りや村人や旅人が感染した場合の取扱い方法についての規則が決められました。また、奥津村の医師・石田右門は患者の治療に奔走し、ついには自らも感染し亡くなっています。

人形仙国一山鉄山で亡くなつた三十七名については、その鉄山経営者である津山堺町の泉源助により、供養塔が建立されました。これが最初に述べた供養塔です。現在では「人形仙三十七人墓」とよばれ、当時の山深い集落で起こつた悲劇を伝える歴史資料として、町の指定文化財となつていますが、今でも墓参に来れる方が絶えません。



人形仙三十七人墓

地元に伝わる逸話では、この時に消毒薬として使用していた石炭酸を飲んだ者は、胃が焼けて死亡し、薬をムシロの下に隠して飲むふりをした者が助かつたという話もあります。想像できる逸話ですが、同年七月一日付けの山陽新報には、コレラ予防のために、県庁において職員が酒を飲むことを許可されたという記事もあり、今となつては笑い話のような俗説も広まつていてることがわかります。

参考資料

「上齋原村史」(通史編・民俗編)
「作州のみち」2、「奥津町史」(通史編)、「岡山県史」、「世相おかやま」、「山陽新報」

生涯学習課 口下
電話(0868)54-7733